フクロウに滅ぼされた村

山里純一

はじめに

居住者がいなくなった村を廃村という。廃村という現象は過疎化や村落移動、また自然災害など、さまざまな要因によって起こるが、民話の世界では、史実とは異なった理由が語られる。小稿では、八重山地方でのみ聴取される、フクロウが村を滅ぼす話について見ていくことにしたい。

一　野底御嶽のツカサをめぐる二つの民話

野底御嶽とは野底村にあった御嶽すなわち拝所のことで、ツカサとは御嶽の神に奉仕する女性神役をいう。その野底村は、一七三二年（雍正一〇）に首里王府によって、黒島から四〇〇人を強制的に移住させて石垣島の北方に新たに建てられた村である。[1] この強制移住による村建ては、黒島に住むマーペーとカニムイという二人の男女のうち、女のマーペーのみが移住することになり、マーペーは毎日、野底地域で一番高い野底岳の頂上に登って、カニムイのいる黒島を見ようとするが、オモト山に遮られて見えず、失意のうちに石と化したという「野底マーペー伝説」を生み、八重山民謡「チィンダラ節」でも歌われるようになった。

その野底村の女性神役と村人との葛藤を背景とした民話が、石垣市の白保と登野城の両地域に伝承されている。

①白保の「野底御嶽のツカサ」[2]

えー、野底のスカサ（司）、昔、野底（村）に野原のスカサという願い（をする）人がいた。この人の願うことが全く通らないので、村の人たちは、

「ああ、この人はもうどうしようもない」と言って、この野底のスカサを信用する人はいない。それに、

「野底のスカサの願ったものはみんな間違っている」と、スカサを叱ったので、このスカサは立腹して、自分の子どもに、

「もし私が死ねば、村の後方の寅の方角（北東）の丘の上に、私の墓を造りなさい」と言っていたので、（子どもは）

「（どうして）そこに墓を造るのか」と（聞いたら）、

「いや、村、野底村では、もう、叱られておれないので、野底村を自分が食べて〈滅ぼして〉しまうから。この奴らはただではおかないから」と言った。

野底の人たちは、この人が死んだので、スカサが死んだので、

「ああ、この人の墓はフキドー川の北隅の石がま〈洞穴〉に持って行っておけ」と。そしたら、野底村はそれから栄えていったということで、野底のスカサは、自分の村の人を、島の人を食べてしまおうとしたら、自分が食われてしまった、という話。

話者は一九一一年（明治四四）生まれの米盛一雄氏である。スカサとはツカサと同じ女性神役のことである。村人はこのスカサの言うことを信用せず、けなしてばかりいた。これに腹を立てたスカサは、自分が死んだら村人を食ってしまおうと考え、息子に、墓は北東の高台に造るように遺言する。しかし村人はスカサをフキドー川の北隅の洞穴に葬った。そうしたら村は栄えたという内容である。

スカサが自分の墓を村の北東の丘の上に造らせようとしたのは、怨霊となって村を滅ぼすには村を見下ろす高台の方が有利と考えたからであろうか。しかし村人はスカサの骨を洞窟に閉じ込めることによって難を逃れたというのである。

②登野城の「ツクグルに滅ぼされた村」[3]。

野底の近くに吹通川（ふきどうがわ）という川がある。その川の近くにね、昔、村があったそうだよ。村があって、そこで御嶽の司（つかさ）というのが住んでおった。司というのはね、ここでは御嶽に仕える女、神に仕える人のことだよ。

どういう訳か知らないけれども、その村ではね、司を大変いじめていたらしい。いじめてね、とうとういじめ殺して。で、これを吹通川の川岸に棄てたということだよ。そうすると、その晩、ツクグルの群れが村を襲って、家に入り込んで寝ておる人々の目をえぐって喰ったということでね。この村では暮らしていけないと、みんなそこから逃げてしまったという話。

話者は一九一〇年（明治四三）年生まれの牧野清氏である。吹通川（フキドーカーラ）とは、石垣島の於茂登山系の一つ野底岳の南方を水源とし、島の北側東シナ海沿いのフキドー浜へ流れ注ぐ、全長一、五メートルの川であるから、吹通川の近くにあった村と言えば野底村に限られる。また御嶽のツカサとは野底御嶽のツカサのことを言ったものであろう。村人にいじめられ、とうとういじめ殺された野底御嶽のツカサはツクグル（フクロウ）に化して村を襲い、村人を殺したため、村人は村を捨てて逃げたという内容である。

この二つの民話は、村人と御嶽のスカサ（ツカサ）の葛藤を語る部分は同じであるが、①は、スカサは死んで村人に復讐しようするが、村人によって阻止され、村は栄えた、②は、ツカサは死んでツクグルに化し村人に復讐し、村は滅んだ、と、異なった結末になっている。

現代においても、ツカサになるべき人でないと言って批判されたり、御嶽行事をめぐってツカサの考えと村人の考えが合わず対立することはあるが、昔の野底村でも同様なことが起き、その話が他の地域に伝わり、民話として別々に伝承されてきたのであろう。

ところで一七三二年に創建された野底村は、一七七一年に八重山地方を襲った大津波の記録によれば、当時、人口は五九九人であったというから創建当時の四二五人に比べると、人口は一七四人も増加しており、村は発展しているように見受けられる。大津波でも大きな被害は受けていないので[4]、村はしばらく

は安定的に維持されていたようである。

その後の野底村の動向がわかるのは明治になってからで、一八九三年（明治二六）に野底村を訪れた笹森儀助は、その著『南島探験』において「戸数十、人口二十五人、男十二人女十三人、夫婦四揃、他は寡独ナリ」と記している。一七七一年以降、百二十余年の間に人口が徐々に減っていってこうなったのか、何らかの原因で急激な人口減少となってしまったかは不明だが、ともかく明治の半ば頃には厳しい状況にあった。そして一九〇四年（明治三七）に大部分は伊原間に移住し、最後まで残った一人の女性も一九三四年（昭和九）に字新川へ引っ越し、野底村は事実上廃村になった。[5]

二つの民話の結末が、こうした野底村の歴史と関わっているかは不明だが、少なくとも②の登野城の民話は野底村廃村の理由として、ツクグル（フクロウ）によって滅ぼされたことになっている。

そもそもなぜフクロウなのであろうか。フクロウが村を滅ぼしたという伝承は西表島にもある。

二　大竹祖納堂をめぐる民間伝承

一五〇〇年のオヤケアカハチの乱が起きる前、八重山各地に有力者がいて群雄割拠の様相を見せていた。西表島祖納村には慶来慶田城用緒がいたが、その慶来慶田城用緒の一世紀ほど前に、西表西部にオハタケ祖納堂儀佐という豪傑がいたと言われている。その人物が死んだ後、その屋敷跡に建てられたのが今の大竹御嶽で、『八重山島由来記』（一七〇五年）には「をはたけ根所」の由来が次のように記されている。

をはたけ根所　神名　なし
　　との神名　をたいかねませと神
右由来は、上代、当島西表村・祖納堂と云ふ人あり。其高六尺余高にして、勇力人に勝たる人にて、をはたけと云所に家を作りける。或時、晴天に森に登、四方の景気（ママ）を見渡すに、西の方に島蔭幽に相見得けれは、兵船用意にて勇力の者十数人相語ひ、順風に帆を掲け与那国島に渡り、相戦ひ討勝、島酋長の者二三人生捕り降参させ、後に、悪鬼納かなし御手に入ける時、其由奉奏たる由、申伝也。依之、与那国船当島往還の時は、西表島に潮掛りいたし、彼をはたけ家の火神を拝み申事、今迄有来る也。

これを要約すると次のようになる。

①大竹祖納堂は、高山に登り西方を見て、遙か遠くに島影らしきものを発見する。

②精兵数十人を連れて遠征し、与那国島の酋長等二三人を捕捉する。

③八重山が首里王府の支配下に入った時に、そのことを報告したと言い伝えられている。

④与那国の船が当島を往復する時には、必ず西表島に寄港し、祖納堂家の火の神を拝む。

この御嶽の由来譚はオハタケ祖納堂儀佐の英雄伝説と重なっていて、首里王府が編纂した『琉球国由来記』（一七一三年）・

『遺老説伝』（一八世紀初期）・『琉球国旧記』（一七三一年）にも見える。『遺老説伝』と『琉球国旧記』では、上記の③において、報告したのは「祖納堂」であることを明記するとともに、「遂に中山轄下の地と為る」という語が追記され、④では与那国船の「当島往還の時」が「八重山に往来する時」となっているものの、ほぼ同じ内容である。

また『日本名勝地誌』琉球之部では、大竹儀佐の与那国征討に触れ、以後、与那国島の島民が毎年貢物としてムシロを祖納村に送り、大竹家に納めるようになったことを記している。

これらの文献説話の他に、大竹祖納堂儀佐に関する民間伝承も存在し、西表島出身で、明治・大正生まれの人から聴取されている。文献説話と合わせてこれらの民間説話を整理すると次表のようになる。

表　［大竹祖納堂］伝承比較

	発端	展開1	展開2	結末
A	大竹祖納堂が一人高山に登り、西方、遙か遠くに雲のような島影を発見する。	精兵数十人を連れて遠征し、与那国島の酋長等二三人を捕捉する。		中山に具奏し、与那国船、八重山往還の時、必ず西表島に寄港し、祖納堂家の火の神を拝む。
B	大竹儀佐、高丘に登って四方を眺望し、四方に、雲の如く山の如く、烟の如く見えるものを島と確信し、渡島する。	食人の悪風を改めるため、従う者を臣とし、抵抗する者を惨殺し、与那国島を征服する。		与那国島の島民、儀佐に臣従し、毎年貢物としてムシロを祖納村に送り、大竹家に納める。
C	大竹祖納堂は南端の高台の森から西方に島影を見出す。	・夜間一人で与那国島に渡り、そこでは食人の風習があることを知る。 ・ブナリは、長い髪の毛を船の後ろに結び、船足が遅くなって夜明けに帰宅したため兄の行方を知り、航海の安全を祈願する。 ・祖納堂は、住民から撰んだ有力者数十人を率いて与那国島を征伐し、悪習を改めさせる。	殺された人々の悪霊が木蒐（みみずく）の群となって、与那国の東崎を飛び立ち、祖納村に向かう。	ブナリの祈願によって北からの突風が吹き、木蒐は南のヌーバン（野原）に着く。そして近くのピサドゥー村を祖納村と誤って襲い、村を滅ぼす。

D	E	F
大竹祖納堂は西の方に与那国と思われる島が見えたので、出かける。		大竹祖納堂が西の水平線上に見える雲を島影ではないかと疑う。
与那国島の島民と口論になり、殺す。	大竹祖納堂という人が、皆が寝ている夜中に与那国島へ渡り、味方を助け、手向かう悪者を皆殺しにした。	•祖納堂は家族に「夜釣りと行く」と言って毎夜出かけ早朝に帰ってくるが、ブナリは真相を聞かずに、ひたすら兄の無事を祈り続ける。 •ブナリの祈願のおかげで与那国征討に成功する。
亡霊がマヤチコーとなって祖納堂の後を追う	殺された人々の霊がチコフーと化して、復讐するために祖納村にやってくる。	
マヤチコーが途中で引き返したため祖納堂は助かる。	•祖納堂がクバの葉のうちわで扇ぐと南の方に吹き飛ばされてピラドー村に落ち、そこの人々を皆食い殺した。 •土鍋を被り、土鍋のかけらを投げつけた老婆のみ助かる。 •ピラドー村に人がいなくなり廃村となる。	

A：『八重山島由来記』（一七〇五年）・『琉球国由来記』（一七一三年）・『琉球国旧記』（一七三一年）・『遺老説伝』（一七四五年）
B：田山花袋編『日本名勝地誌』第十一編琉球之部、博文館、一九〇一年。
C：星勲（祖納出身・明治三八年生）星勲『西表島のむかし話』ひるぎ社、一九八〇年。
D：那根弘（祖納出身・明治四四年生）狩俣恵一・丸山顕徳『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』三弥井書店、二〇〇三年。
E：川平永美・安渓貴子・安渓遊地『崎山節のふるさと』ひるぎ社、一九九〇年。
F：那根フジ（祖納出身・大正一〇年生）狩俣恵一・丸山顕徳『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』三弥井書店、二〇〇三年。

民間における大竹儀佐の伝承では、与那国島を征伐したことを中山に報告したことや、与那国船が寄港し祖納堂の火の神を拝む話、与那国の島民から大竹家へ貢物としてムシロを納めた話が消え、（a）祖納堂の与那国島往還とブナリ（姉妹）の話や、（b）フクロウの襲撃の話が加わる。

すなわち（a）は、祖納堂が毎晩「魚を捕りに行く」と言って出かけ、夜明け前に帰宅するのを不審に思ったブナリは自身の長い髪の毛を船尾に結ぶ。そのために船足が遅くなって夜が

明けて帰って来たので、ブナリは祖納堂が与那国島に出かけていたことを知る。以後、ブナリは祖納堂のために祈願し、そのおかげで祖納堂は目的を果たす、というものである。また（b）は、与那国島で祖納堂に殺された人の霊がフクロウと化して祖納村を襲うために飛来してきたと言い、話者により次のように語られる。

Cでは、祖納堂自身が呪文を唱えクバの葉のうちわで扇ぐと、木菟（みみずく）は南の方へ押し流されて、ヌーバン（野原）に着き、近くのピサドゥー村と祖納村と誤って襲い、村を滅ぼす。

Dでは、ブナリの祈願によってマヤチコーが途中で引き返したため、祖納堂は助かる。

Eでは、ブナリの祈願によって風が急に北風に変わり、そのうち突風が吹いて梟は南の方に押し流されて、崎山半島のヌーパン（野原）に着き、近くのピサドゥー村と祖納村と誤って襲い、村を滅ぼす。しかし一人の老婆は、土鍋を被り、土鍋のかけらを投げつけ助かるが、ピラドゥー村は廃村となる。

Fの場合は特に（b）についての話はない。

伝承の過程で付け加えられたと思われるこれらの話の中で、本題との関係で注目されるのは、殺された人の霊がフクロウ（木菟・マヤチコー・チコフー）に化し、仕返しのために祖納村を襲おうとやってきたが、風に煽られて南の方の崎山半島の南岸あったピサドー村を祖納村と誤って襲い、滅ぼしたという部分である。Eの川平永美氏（明治三六年生まれ）による語りを『崎山節のふるさと』によって掲げよう。

むかし西表祖納村の大竹祖納堂儀佐が与那国島を征伐し、てむかう悪者どもをうち殺しました。この時殺された与那国島の人々の霊がチコフーと化して大群をなして海を渡って祖納村を襲い、怨念をはらそうとやってきたのです。しかし大竹祖納堂儀佐はなかなかの物知りで占いをたてて早くもこのことを察知し、チコフーの大群に向かって呪文をとなえながらクバ（ビロウ）の葉の大うちわをあおいで風を起こしました。すると、うちわの風はすごい大風となって、ついにその大群を遠くの南の方へ吹き飛ばしてしまいました。そのためチコフーたちは祖納村に入ることができずに南の崎山半島南岸のビラドー村を襲い、人々を食い殺しました。しかしおばあさんがただ一人土鍋をかぶって隠れ、近寄るチコフーに土鍋のかけらをたたきつけて殺し、助かりました。ビラドー村は、この時に人がいなくなり廃村になったということです。

このようなことがあってから、西表島ではチコフーがなくと「チビナビ　ヌ　カキンナ　ミンダ　チクンドー（土鍋のかけらで目玉をくりぬくぞ）」と呪文をとなえ、チコフーはこれをきくと驚いて逃げるようになったということです。

ピラドー村はピサイシ村とも呼ばれ、西表島の崎山村と鹿川（かのか）村の間、崎山半島の南西海岸沿いにあるピサ石付近の丘陵地帯にあったと言われる。記録には全く表れないため、いつ建てられ、いつ廃村になったかも不明であるが、ピラドーという地名

に由来する村名の伝承や村跡があったという証言もあるので、[6]存在したことは確かであろう。

大竹祖納堂の伝承の中では、祖納村を襲うためにやってきたチコフーは祖納堂の呪術によって吹き流されて崎山半島南岸のビラドー村を襲ったというが、（C）ではまずヌーバンに着き、近くのピサドー村を襲っている。ヌーバンとは崎山半島の西端の野原を言い、近くには後に廃村となる崎山村もあった。[7]しかし襲撃されたのが崎山村ではなく、ピサドー村であったのはなぜか。祖納堂儀佐の時代に崎山村はまだ村建てされていなかったのであろうか。それは措くとしても、殺された人間の霊がフクロウに化して、殺した人間に仕返しをし、そのため村は滅ぶという話の内容は、石垣島の「ツクグルに滅ぼされた村」と似ている。しかし仕返しの相手は島民を殺した祖納堂および祖納村のはずが、風に煽られてたまたま着いたピサドー村の人々で、そのためピサドー村は廃村になる。ピサドー村にとっては気の毒な結果となっているが、西表島の伝承にも廃村とフクロウの関係が見られる。

なお本話では最後はフクロウを追い払う「呪文」の由来になっている。沖縄ではフクロウが屋敷内で鳴いたらこの家に災厄が起こるか死者が出ると言われ、[8]フクロウは忌み嫌われる鳥である。したがってフクロウの鳴き声がすると、屋敷内に入ってこないように追い払った。この時、フクロウに向かって「チビナビ　ヌ　カキンナ　ミンダ　チクンドー」と言ったというが、この種の「呪文」は他の地域ではほとんど聞くことはなく、[9]崎山村独特の伝承である。

おわりに

民話の中で登場する石垣島の野底村を滅ぼしたツクグルも、西表島のピラドー村を滅ぼしたチコフーも、フクロウの種類でいえばリュウキュウコノハズクである。[10]そもそもフクロウが人を攻撃することはなく、また集団行動を取ることもないが、八重山においてフクロウの一種マヤツクグルは「後世（あの世）の使い」と呼ばれていた。そのため村が滅ぶことを人間が死ぬことと同様に考え、廃村の原因としてフクロウによって滅ぼされたというモチーフが考え出されたのであろう。

注

（1）『八重山島年来記』。また一七三二年には、野底村の他に、桃里村（石垣島）、高那村（西表島）も同時に村建てを命じられている。こうしてできた新村は、過酷な開墾労働とマラリアによって、徐々に人口が減り、ついには廃村の憂き目にあった。

（2）石垣市史研究資料7『白保の民話』1、石垣市教育委員会、二〇一八年。

（3）琉球の伝承文化を歩く4『八重山・石垣島の伝説・昔話（二）—登野城・大川・石垣・新川—』三弥井書店、二〇一七年）。

（4）八重山の行政庁「蔵元」から首里王府に提出された『大波之時各村之形行書（なりゆきしょ）』によれば、二四人は溺死したものの、五七五人は生き残り、村や御嶽に被害はなかったようである。

（5）『石垣島白保以北の旧村々』（八重山文化研究会、二〇一一年）

一六六頁。

（6）安渓遊地・安渓貴子編『崎山節のふるさと』（ひるぎ社、一九九〇年）五九頁。

（7）『八重山島年来記』には乾隆二十年（一七五五年）のこととして、網取村より六二人、鹿川村より九二人、波照間島より二八〇人、祖納村より一〇人を移して崎山村を新たに建てたとある。その崎山村が事実上の廃村になったのは一九四八年（昭和二三）である。

（8）島袋源七『山原の土俗』二一四頁、郷土研究社、一九二九年。

（9）ただ石垣市大浜では、フクロウに向かって「お前は、何か意図でもあるのか、誰から言われてここに来たのか」というような言葉を発して石を投げたという（『大浜村誌』）六一七頁）。

（10）琉球列島には、リュウキュウコノハズク、アオバズク、オオコノハズクの三種類のフクロウが生息していると言われ、そのうち八重山諸島に生息するのはリュウキュウコノハズクとアオバズクである。石垣方言では、前者を、猫のような鳴き声をすることからマヤツグルと呼んでいる。